



よみがえりの泉



にし はる

ぼくは、森の入り口についた。

うっそうとした木がおいしげる、大きな大きな森。

もくてきち
目的地は、よみがえりの泉。

この森の中にあるはずだ。

はやり病

3日前、ぼくの住んでいる村で、^{げんいん}原因のわからない病気がはやりだした。
とても高い熱が出て、
「熱い、熱い、体が燃えそうだ...！助けてくれーッ！」
と、たくさんの村人たちが苦しんでいる。

村で、^{きんきゆう}緊急の集まりが開かれた。
「医者も、どうしようもないと言うし...。」
「これはもう、あの^{ほうほう}方法しかないのではないのでしょうか。」
「あの^{ほうほう}方法...。」
「そうです。北の森にある、よみがえりの泉の水を、病人に飲ませるのです。」
「しかし、あの泉の話は、言い伝えであって、本当にあるかどうかわからないし。」
「じゃあ、ほかに^{ほうほう}方法があるのですか。」
「.....。」
みんな、だまりこんでしまった。

すると、みんなの意見を聞いていた村長さんが言った。
「病気が治るかもしれないのなら、行くべきじゃ。
この病気は、熱が10日間下がらないと死んでしまう、おそろしい病気じゃ。
しかし、あの泉へ行って帰ってくるには7日かかるそうな。
病気がはやりだして3日たっておる。
とにかく急がねば。」

そこで、村の若者3人がよばれた。その中の1人がぼくだ。
村長さんは言った。
「北の森にあるという、よみがえりの泉は、本当にあるかどうか、わからない。
しかも、森には^{ようかい}妖怪がいて、行ったら戻ってこられないとも言われておる。
しかし、病人たちは、熱が10日下がらないと、死んでしまう。
おまえたちの命の^{ほしょう}保証はないし、間に合うかもわからぬが、どうか、行ってはくれまいか。」
「はい！」
と、返事をしたのはぼくだけで、あとのふたりは^に逃げて行ってしまった。

本当はぼくも、^に逃げたかった。でももう、あとには引けない。ぼくは、よみがえりの泉の水を
必ず持って帰ることを^{ちか}誓った。

北の森へ

ぼくは、さっそく大きなたるを^{せお}背負った。

すると、村長さんが何か持ってきて、言った。

「これは、薬と黒ガラスじゃ。北の森に入る時に^{ひつよう}必要だと言いつたおられておるものじゃ。持って行きなさい。」

ぼくはそれをカバンに入れて、ひとりで^{しゅっぱつ}出発した。

森は、村の北のはずれにあった。子どものころから、おとなたちに「行ってはいけない」と言われていたので、この森に来たのは初めてだった。

ふと見ると、ずいぶん古びた^{かんばん}看板が2つあった。

左側にある^{かんばん}看板の砂ぼこりを落としてみると、左側を指す矢印があらわれた。そして

「よみがえりの泉 回り道 ^{あんぜん}～安全～」

と書かれてあった。

「やった！^{かんばん}看板があるくらいなら、よみがえりの泉はあるにちがいないや！」

ぼくは喜んだ。

そして、もうひとつ、右側にある^{かんばん}看板も気になったので、その砂ぼこりも落としてみた。すると、森のほうをまっすぐ指した矢印と、

「よみがえりの泉 近道 ^{きけん}～危険～」

と書かれてあった。しかも、矢印の指している方向には、道なんてなかった。

ぼくは^{まよ}迷った。^{きけん}危険な道よりも、^{あんぜん}安全な道がいいに決まっている。

「でも...、7日しかないんだ、回り道をしているひまはない！村人たちを早く助けなきゃ！」

ぼくは決心し、ドキドキしながら、右側の^{かんばん}看板の矢印が指すほうへ足を^ふ踏み^こ込んだ。何しろ道がない。ぼくはコンパスを出して、北のほうへまっすぐ向かった。

まっすぐ進め

一歩踏み込んだとたん、うっそうとした森の木のせいで、太陽の光がさえぎられ、まだ朝だというのに真っ暗になった。

「いてッ」

何かがうでに刺さった。よく見てみると、いばらのトゲだった。大きなトゲがたくさんある。でも、まっすぐ進まなければ間に合わない。

「こんな痛み、病人たちの苦しみにくらべれば、なんてことない。」

ぼくはそうつぶやいて、体じゅうをトゲに刺されながら、とにかくまっすぐ進んだ。

やっと、いばらのしげみを通り抜けた。ケガのひどいところに、村長さんのくれた薬をぬった。

「これはすごい。キズがみるみるうちに治ったぞ！」

すると

ガサガサッ

いきなり、物音が聞こえた。ぼくはドキッとした。まっくらな中、音がしたほうをじっと見てみると、大きなヘビの妖怪が木に巻きついて、こっちを見ていた。細くて真っ赤な舌をちょろちょろと出している。

（こいつが森の妖怪か！）

ちぢみあがったぼくに、大ヘビが話しかけてきた。

「人間が来るなんて、ひさしぶりじゃのう。」

ぼくは、きっとこの妖怪に食べられるのだと思い、もうダメだと泣きそうになったけど、勇気をふりしぼってたずねた。

「ぼくを食べるつもりなのかい？」

「そうじゃな。ひさしぶりの人間じゃ。しかも若くてうまそうだ。

...それにしても、今までここに来た人間は、わしを見て、こわがって、剣をふりまわしたり、鉄砲をうってきたりしたもんじゃよ。おまえはこわくないのか？」

「こわくないと言ったらウソになるけれど、ぼくにはやらなきゃいけないことがあるんだ！だから、こわがっている場合じゃないんだ！」

「やらなきゃいけないこと？」

「村に、大変な病気がはやっているから、この森の中にあるっていう、よみがえりの泉の水が必要なんだ！」

「はて、泉なんてあったかな。

しかし、それなら、わざわざこんなところに来なくても、安全な回り道があったじゃろうに。」

「回り道なんてしているひまはないんだ！」

その時、

「あいたたた・・・」

大へび妖怪ようかいが、突然とつぜん、痛がりだした。

「どうしたんだい？」

「前に人間どもが来たときに剣けんで刺されたところや、鉄砲てっぽうのたまが当たったところが痛いんじや。わしは手がないから、どうしようもないんじや。」

大へび妖怪ようかいの体をよく見てみると、剣けんで刺されたあとや鉄砲てっぽうでうたれたあとがいくつもあつた。

大へび妖怪ようかいは言った。

「おまえさん、さっき、いばらの道を通りぬけたあと、キズに薬をぬっていたな。それをわしにぬってくれたら、食にわずに逃がしてやるが、どうじゃ。

しかし、キズが治らなかったら、おまえさんをひとくちでいただくからな。」

「わ、わかったよ！」

ぼくはこわい気持ちをおさえながら、大へび妖怪ようかいの体を頭いのの先からしっぽの先まで見てまわつて、キズに薬をぬってやった。

そして、祈いのるような気持ちでキズを見つめた。すると、

「こりゃすごい、痛みがまったくなくなっちゃった！」

大へび妖怪ようかいが体をくねらせて大喜びし始めた。見ると、キズがみるみるうちに消えていった。

ぼくは、胸をなでおろした。

「じゃあ、ぼく急ぐから、行くよ！」

「ああ、おまえさんを食にえなかったのは残念だが、キズがなおってよかった。ありがとよ。」

ぼくは、食べられずにホッとして、また歩き出した。コンパスを見ながらまっすぐ北へ。道のなんてない。たおれた木や大きな岩、土砂がくずれたあと、全部、まっすぐ乗り越こえた。

そんな道を1日歩くと、川につきあたってしまった。流れは急で、川はばも広く、歩いてわたるのはとてもムリそうだ。

「どうだい、ここをわたるのは、とてもムリじゃろう。」

ふりむくと、大へび妖怪ようかいがついてきていた。

「さっきのお礼じゃ。わしが、橋になってやろう。」

そう言うと、大へび妖怪ようかいは川に入った。そして、頭を向こう岸につけて、しっぽをこっこの岸につけて、橋になってくれた。

「うわあ、これは助かるよ。ありがとう！」

ぼくは、大へびの橋をわたって、向こう岸につくことができた。

まっすぐ進めない

そこからまた、まっすぐ歩いた。コンパスを確かめながら、北へ、北へ。

たおれた大きな木を登ったりくぐったり、どろどろの深い沼^{ぬま}でおぼれそうになったり、それでも、まっすぐ進んだ。

そんな道を2日ほど進むと、大きな岩のカベがあらわれた。右を見ても、左を見ても、そのカベはどこまでも続いている。よじ登ろうと思っても、高すぎてとてもムリだ。体当たりをしてみたけれど、びくともしない。

ぼくは、とほうにくれてしまった。

(やっぱり、回り道をしたほうがよかったかな。ここをまっすぐ進むなんて、とてもムリだ...。)

ぼくはその場に座りこんでしまった。

すると、おしりのあたりがモゾモゾと動きだした。びっくりして立ち上がると、土がモコモコともり上がって、大きな茶色い頭が出てきた。

「だれだ？おれさまの家の上であばれているやつは。」

見ると、大きなモグラ^{ようかい}の妖怪^{ようかい}だった。

「おや、人間なんて、ひさしぶりだな。しかも若くてうまそうだ。しかし、いったい何しにこんなところへ来たんだ？」

ぼくは、今度こそ食べられるかもしれないと、ふるえながら答えた。

「村の人たちが、病気で大変なんだ！それで、よみがえりの泉の水を取りに来たんだ！」

「よみがえりの泉？ああ、この岩カベのむこうにある泉のことか。」

「え、本当かい？よみがえりの泉はそこにあるのかい？」

「ああ。わしもしばらく行ってないな。本当は、わしも泉の水が飲みたいんだ。なにしろとびきりうまいんでな。でも...。」

「でも？」

「あの泉は、とても輝^{かがや}いていてな、わしにはまぶしすぎて、とても行くことができないんだ。」

「へえ...。じゃあ、まぶしくなければ、泉に行くことができるのかい？」

「ああ。この岩の下を通って行くことができる。おまえさんを食べれば、目がじょうぶになって、まぶしくても泉に行くことができるんだがなあ。」

「そうなのか...。」

ぼくは、ふるえながら考えた。ここで食べられてしまっははおしまいだ。

「あ、それなら！」

ぼくは、カバンに黒ガラスがあることを思い出して、それを取り出した。そして、モグラ^{ようかい}妖怪^{ようかい}の大きな頭と小さな目に合うように、黒ガラスでメガネを作った。

「これをしていけばいいよ！」

「なんだ、これは。」

「黒ガラスで作ったメガネだよ。まぶしいところに行っても、これを目にしていればまぶしくないよ。」

「ほお、こんな^{べんり}便利なものがあるのか。」

モグラ^{ようかい}妖怪は、ぼくが作ったそのメガネをつけたり、はずしたり、ながめたりしていた。ぼくは、それをドキドキしながらながめていた。

すると、モグラ^{ようかい}妖怪は、ニッと笑って言った。

「ありがとう。これなら、泉へ行って水を飲むことができる。お礼に、泉まで道案内してやるよ。わしのあとについてくればいい。

ただし、とちゅうであきらめたら、おまえをひとくちでいただくからな。」

「ほ、本当かい？わかったよ！」

モグラ^{ようかい}妖怪は、出てきた穴から頭を^{あな}ひっこめた。ぼくはこわかったけど、急いでそのあとにつづいた。

モグラ^{ようかい}妖怪は下へ下へともぐっていった。ぼくは、^{ひっし}必死についていった。地球の^{ちきゅう うらがわ}裏側に出ちゃうんじゃないかと思うくらい、もぐった。

どれくらいもぐっただろう、とにかくひどく寒く、体が冷えきって動かなくなりそうだった。

すると、いったん小さな部屋みたいなところにたどりついた。どうやらモグラ^{ようかい}妖怪の家らしく、そこだけ^{いっしゅん}一瞬あたたかかった。

しかし、休む間もなく、こんどは、上に上に登り始めた。

ぼくは、その部屋にとどまりたかった。それを見すかすように、モグラ^{ようかい}妖怪がふりむいて言った。

「どうだ、あきらめるか？」

「いや、あきらめないよ！」

「チッ」

モグラ^{ようかい}妖怪は舌打ちした。

ぼくは、最後の力をふりしぼって、^{ひっし}必死についていった。

登り続けてどれくらい時間がたったかわからない。頭はボーッとなり、手足はしびれ、体はもう^{げんかい}限界だった。泉にたどりつくのは、やはり無理かもしれない、と、ぼくはくじけそうだった。でも、あきらめるわけにはいかない。とにかく、一步、また一步と上へのぼった。

そのとき、

「ついたぞ。」

^{ようかい}

^{ようかい}

モグラ^{よづかい}妖怪の聲が聞こえて上を見ると、明るい光が差し込んでいた。モグラ^{よづかい}妖怪は黒ガラスメガネをして、ぼくにニッと笑ってみせた。

^{あな}穴から出ると、大きな大きな泉が目の前にあった。今まで見たことのない、七色の水が輝^{かがや}いて、モグラじゃなくてもまぶしいくらいだ。

「やった！これが、よみがえりの泉か！」

そこはとてもあたたかく、凍^{こお}った心身は一瞬^{しんしん いっしゆん と}で溶けた。

ぼくはさっそく、せおってきた大きなたるに、その水を満杯^{まんぱい}にくんだ。不思議^{ふしぎ}なことに、たるは少しも重くならなかった。

モグラ^{よづかい}妖怪も、ぼくの作ったメガネをかけて、ごくごくと水を飲んだ。

「ああ、うめえ。やっぱ、この泉の水は最高だ。いいものくれてありがとよ。これからは、これでいつでも泉の水が飲める。」

「よし、じゃあ、ぼく急がなきゃ！どうやら、あと2日しか時間がない！今の道、また通らせてもらってもいいかい？」

「もちろんだ。あばよ。」

「さよなら！」

一路(いちろ)、村へ

泉まで5日かかっている。ということは、帰りも5日かかるかもしれない。
でもぼくは、あきらめずに、来た道を帰り始めた。

モグラ^{ようかい}妖怪^ほの掘った穴^{あな}をふたたびくだってのぼるだけで1日半かかってしまった。
「間に合わないかもしれない…。でもまだ半日、時間はある。とにかく急がなきゃ！」
あせりながら穴から頭を出すと、何かがコツンと頭に当たった。見上げると、見たこともない
大きな鳥が、くちばしでぼくをつつこうとしていた。

「おや、ミミズかと思ったら、人間じゃないか。こりゃ若くてうまそうだ。」
ぼくは、^{ばんじきゅう}万事休すだと思った。でも、最後の勇気をふりしぼって、大トリ^{ようかい}妖怪に言った。
「ぼく、今日中に、この水を村へ届けなきゃいけないんだ。ぼくを食べるのはその後にしてくれないかい？」

「おやおや、いい心がけだね。それなら、おれの背中に^の乗るといい。どんなに急いだって村まで3日はかかる。わしの背中に^の乗って飛んでいけば半日で村に着くよ。おれも早くおまえをいただきたい。さあ、乗った乗った。」

「本当かい？それは助かるよ！」
ぼくはこわいのも忘れて、急いで大トリ^{ようかい}妖怪^のの背中に乗った。そして、すばらしい速さで村へ向かった。

村に^{ぶじ}無事に着いたのは、村を出てからちょうど7日目ギリギリだった。村長さんや村の人びとは、大トリ^{ようかい}妖怪^{おどろ}に驚いていたけれど、大喜びでぼくを^{むか}迎えてくれた。そして大急ぎで、七色^{かがや}に輝く泉の水を病人たちへ届けに行った。

病人たちは、その水を飲むと、たちまち熱が下がって元気になった。言い伝えは本当だった。
ぼくたちは、手を取りあって喜んだ。

勇敢(ゆうかん)な心

「さあ、やくそくだ。おまえさんをいただくよ。」
大トリ 妖怪ようかいが言った。

すると、村長さんが言った。
「大トリの 妖怪ようかい どの、この者は、村の大事な若者じゃ。何か別の食べ物を用意するから、ゆるしてはもらえまいか。」

「別の食べ物？そりゃだめだ。こいつはおれが食べるんじゃない。おれの子どものえさなんだ。こどもにとって若い人間の肉ほど、食べやすくて 栄養えいようのあるものはないからな。」

ぼくは言った。
「病人たちを助けることもできたし、ぼくはもう思い残すことはありません。さあ、やくそくをは果たそう。ぼくをきみの子どものところに連れていっておくれ。」
ぼくは、大トリ 妖怪ようかい の背中に乗ろうとした。

その時、まぶしい光がぼくをつつんだかと思うと、ぼくの体はふわりと浮うかんだ。気が付くと、ぼくは 黄金おうごん に 輝かがや く羽はねの上はねにいた。

村長さんがさげんだ。
「こ、これは！ 伝説でんせつ の不死鳥ふしちょう、フェニックスじゃ！」

すると、ぼくの頭の上で、なんともやさしい声がした。
「そう、わたしはフェニックスです。妖怪ようかい に姿を変えて、真まことに 勇敢ゆうかん な者を探していたのです。大ヘビの妖怪ようかい も、モグラの妖怪ようかい も、すべてわたしです。このかたのおかげで、よみがえりの泉を守ることができそうです。今までの無礼ぶれいをお許ゆるしてください。」

「泉を守る？」
ぼくがたずねると、フェニックスは答えた。
「はい。実は、よみがえりの泉は、100年に1度、真まことに 勇敢ゆうかん な心こころに触れなければ、枯かれてしまうのです。」
「真まことに 勇敢ゆうかん な心...。」

「そうです。
あなたがどのようなおそろしい目にあっても、最後まで 誓ちかいをつらぬいてくださったのおかげで、その真まことに 勇敢ゆうかん な心こころを見つけることができました。
今日はちょうど100年目。あなたの心こころに触れたこの泉の水を持ち帰って、よみがえりの泉へ注そそ

ぎます。」

そう言うと、フェニックスは、ぼくをやさしく地面^{じめん}におろした。

そして、大きな黄金^{おうごん}の翼^{つばさ}でふわりと飛び立って、森の方へとはばたき、消えていった。

その後、北の森はフェニックスの森として、大事に守られるようになった。

そして、ぼくが通った森の道は、だれでも通れるように、きちんとした道が作られて、よみがえりの泉の水が^{ひつよう}必要 なときには、いつでも通れるようになった。

ぼくは、あのとき、まわり道ではなく、まっすぐ進む道を選^{えら}んで本当によかったと思った。